

文化

Art & Culture



上間 陽子

沖縄を抱えて生きる

歴史や構造描くために

日本復帰50年の節目でなされた沖縄の人々の聞き取り調査で、語り手が泣き出したことがある。本土復帰前、パスポートを手に沖縄を離れ、再び沖縄に戻ったという70代の男性の話を聞いていた時だ。妻をみとった後、認知症の症状が出て施設入所が決まり、住み慣れた家で話を聞ける、これが最後の機会とのことだった。

大きな体を座椅子に押し込むように座った男性は、10代で沖縄を離れて横浜や広島で船造っていたと話した。内地の生活は面白かった、週末は同僚に海にも山にも連れていってもらったと楽しそうに話していたのに、「あの頃、沖縄にはこんな歌があったよ」と言っていて「沖縄を返せ」という歌を歌うと、突然、声を上げて泣き出した。

泣きやむのを待ってから、「日本復帰を求める沖縄の歌ですね？」と尋ねるとうなずいて、へるりと部屋を見渡し、「朝、起こしにいったら、妻(トウジ)はあっちの部屋で死んでいたよ」と泣いた。それからしばらくたつと思ひ出したように「沖縄を返せ」を歌ってまた泣いた。

男性が故郷を離れた頃、

アメリカ占領下の沖縄では、祖国復帰の運動がなされていた。遠く離れた土地で、男性はその歌を聞いたのだろうか。沖縄は日本に復帰したが、本土から移設されて、米軍基地はますます増えた。

今と昔の記憶が巡る家の中で、何をどう尋ねたら沖縄の物語にたどり着くのかと途方に暮れた。

沖繩のリアルを描いたと宣伝された「選い」と(2003年公開という映画は、若い息子がいる10代の少女の話だった。パートナリーから暴行を受けている主人公は、お金が必要になり売春する。やめさせよう

力、日本が沖縄にふるった暴力、沖縄内部の暴力と貧困の実像を浮かび上がらせる。だからこそ私たちは、これらをなくするため何ができるのかと思考を促される。このような沖縄の歴史が響き渡る声を聞き、それが遠くまで届く沖縄の物語を書きたいと私は思う。

沖縄出身の劇作家兼島拓也は戯曲「ライカムで待つ」とで、「沖縄は、日本のバックヤード」という言葉を使い、米兵にレイプされるのは孫が娘か連べ、といっせりふを顧客に突き付ける。沖縄がそうした場所にされていくことを知らしめ、共に考える空間を作り出そうとしたのだろう。おそらく、そういう場を無数に作り出すことが私たちに求められている。

あの日、私が十分に聞くことができなかった物語は、男性の中に眠っている。歌を覚えてくれたのは誰だったのか。あの歌を誰かと歌うこともあったのか。沖縄に帰ろうと決めたのはどんな日だったのか。沖縄が日本に復帰してから年月、何を感じて、どう生きてきたのか。

あの家はもう壊され、更地になったのだろうか。それでも物語は残る。沖縄を抱え、あなたはどうか生きてきたのか。もう一度、あの男性の話を聞いてみたいと思っている。(教育学者)

米軍キャンプ・シムラのフェンスをつかみ、抗議する人
11月7日 沖縄県名護市辺野古



野木はその暴力や貧困を作り出しているのは誰か、という問いを手放すことなく、米兵が沖縄にふるった暴

11月1回掲載